

幕末期に来日した二人の仏人宣教師の 日本語ローマ字表記について

Le ROUX Brendan*

はじめに

« CHAPITRE CLVIII

Cy commence de l'isle de Sypangu »¹

というような表現によって、日本は初めてヨーロッパの書物、そしてヨーロッパ人の認識に表れてきた。年は1298年である。17年間モンゴル帝国の第5代皇帝（大ハーン）フビライに仕えたマルコ・ポーロというヴェネツィア共和国の商人が日本に関する色々なうわさを聞いて、1298年に牢獄において口語で伝えたとされる『東方見聞録』の中にそれらをまとめたのである。当時は、ヨーロッパ人が誰も訪れたことのない日本のことが「日本国」、つまり「ribênguó」という中国的な発音で紹介され、後にその呼称が広まったわけである。しかしその呼び方以外は、マルコ・ポーロは日本の地名や固有名詞、日本語の単語を紹介してはいない。

ヨーロッパにおいて日本に関する知識を増やしたのは、1543年より日本に上陸したポルトガル人であることは周知の通りである。特に1549年のザビエルの来日をもって活動を始めたカトリック教の宣教師によって、日本に関する様々な情報が収集されヨーロッパへと伝わって行った。それらの日本のことを紹介するために、その名称をヨーロッパ諸言語の使うアルファベット（主にラテン語系のアルファベット、つまりローマ字）に変更する必要が生じた。ところが、当時は特定の表記法がなく、日本の仮名とヨーロッパのローマ字を一对一で対応させた方式がなく、著者ごとにそのローマ字の表記法が異なって

いたわけである。しかもヨーロッパ人としてオランダ人のみが日本との関係を許された1639年まで、ポルトガル人の他にスペイン人やイギリス人も来日したが、その報告書・書物においてそれぞれの諸言語の特徴に合わせた日本語の表記方式が使用されていたということも当然に理解できることである。

「鎖国」と呼ばれている時代においても日本に関する書籍がヨーロッパで出版され続けたが、19世紀に完成しそれ以降広く使われるようになったヘボン（James Curtis Hepburn, 1815-1911）式ローマ字に慣れている現代人から見てもかなり不思議なローマ字表記も見られるのは驚くべきことであろう。以下の短い史料はその一例である。

« (...) Dicitur *Ximum*, i.e. Regia inferior & *Saycock*, i.e. novem regna, quot continet: *Nempe Figen, Bungo, Chicuien, Fingo, Fiunga, Bugen, Satcuma, Volumi* [Vosumi?] & *Uto*. In his præcipuæ urbes *Arima, Bungo, Nangasachi & Satcuma*. »

Hofmann, Johann Jacob (1635-1706):

Lexicon Universale (1698), art. “XIMUM, vulgò Ximo”

「〔前略〕シモ〔下〕つまり下の朝、そしてサイコック〔西国〕、つまり九つの朝、と呼ばれている。なぜならば、フィゲン〔肥前〕、ブンゴ〔豊後〕、チクイエン〔筑前〕、フィンゴ〔肥後〕、フィウンガ〔日向〕、ブゲン〔豊前〕、サツマ〔薩摩〕、ウオルミ〔ウオスミ?大隅〕とウト〔宇土?筑後〕を含むからである。その主な都市は、アリマ〔有馬〕、ブンゴ〔豊後〕、ナンガサキ〔長崎〕とサツマ〔薩摩〕である。」

ホッフマン・ヨハン・ヤコブ (1635-1706)、『万物事典』

* ル・ルー ブレンダン 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科社会系教育講座

キーワード：幕末／宣教師／ローマ字表記／日本語／フランス語

(1698)、「シムム、俗シモ」事項

この論文は、幕末期、つまりヘボンと同じ時期に来日したメルメとムニクという二人のフランス人の宣教師の著書を基に、彼らのローマ字による日本語表記法を分析することを目的とするものである。日本に長年滞在し、日本語を学び日本人と接することが多かったそれらの宣教師の表記法を分析することで、江戸時代末期の日本語の発音を推測することがある程度でき、ヘボン式とは違う、「フランス式」のローマ字による日本語表記法を見出すこともできる。一方、未だ統一されていなかったフランス人宣教師の表記法から、開国期に日本に滞在していた西洋人間の情報の交換・ネットワークも察することもできると考えられる。

一 フランス人宣教師の来日

1858(安政5)年に日本とアメリカ、ロシア、オランダ、イギリス、フランスとの間に締結された条約(いわゆる「安政五カ国条約」)によって、外国人は日本の開港地に住む権利を与えられた。ところがその条件としては、ほとんどの開港地における移動可能な地域(「遊歩の規程」、日仏条約の場合は第3条)は「十里四方」(同条)と限られていた²。そこで来日し始めた外国人のうち、キリスト教に関する禁止の維持にもかかわらず宣教師も現れた。その際に最初に日本に滞在し始めたフランス人の宣教師は、江戸・神奈川においては1859年9月6日よりジラル神父(Prudence Séraphin Girard, 1821-1867)、そして箱館においては1859年11月25日よりメルメ神父(Eugène Emmanuel Mermet-Cachon, 1828-1889³)であった。

1828年9月に、フランス東部ジュラ山脈に生まれたメルメは、1852年に、当時東アジアにおけるカトリック布教をほぼ独占していたパリ外国宣教会(Missions Etrangères de Paris)の神学校に入学した。1854年6月11日に司祭に叙階され、同年8月25日に期待の目的地だった日本へと出発した。1855年2月から日本語を学習するために琉球に派遣されたが、1856年10月に健康状態を理由に香港に戻った。そこでも日本人の漂流民のもとで教科書なしに日本語を勉強し続けた結果、1858年10月に、最初の日仏条約の交渉でフランス全権グロ男爵(Jean-

Baptiste Louis, Baron Gros, 1793-1870)の正式通訳を務めたメルメは、条約交渉の際に、五つの締結国の中で唯一の日本語通訳・翻訳者として活躍できたほどの日本語能力を身につけていた。箱館に到着した時点で、琉球と江戸での滞在経験があり、既に日本に関する知識を修めていたわけである。

1863年の夏まで箱館に滞在したメルメは、病院⁴やフランス語学校の設定に関ったり、栗本鋤雲⁵を始め多くの箱館の幕吏と接したり、他の外国人外交官と情報交換をしたりして、非常に多面的に活躍を続けた。しかし、日本においてキリスト教の布教は依然として禁じられていたので、宗教的な活動は箱館の外国人カトリック教徒にミサを行うなどに過ぎず、非常に限られたものであった。

一方では、1864年4月27日に第二次フランス公使ロッシュ(Léon Roches, 1809-1900)が着任すると(メルメ自身はロッシュの来日を29日にしている⁶)、メルメはフランス公使館付通訳官として務め始めた。鳴岩宗三によると、ロッシュは香港に寄った時にメルメを雇ったとされているが⁷、メルメ直筆の書簡には、違う事実が記されている。つまり、ロッシュはパリで一時帰国中のメルメに既に接近し、通訳官のポストを申し出たが、メルメが箱館に戻らなければならないという理由で断られた。そして地中海を経て日本へと赴こうとしていたメルメはマルセイユに到着するとロッシュを待つように外務大臣に頼まれたが⁸、出帆が既に決まっていたので、状況により香港で待つことにした。しかし香港に2ヶ月ほど滞在してもロッシュが現れず、結局横浜で面会することとなった。

その際、ロッシュが日本に赴く前からもメルメに手伝ってもらいたかったこと、メルメが以前の滞在地である箱館に必ず戻らなければならないためそのオファーを断ったこと、その結果以前に琉球に滞在していたムニク神父(Pierre Mounicou, 1825-1871)がロッシュに選ばれたこと、について話されたという⁹。ロッシュは自分の日本滞在について何の記述も残していないのでその面会について確認はできないが、メルメはうぬぼれの強い人だったにもかかわらず、恐らく当時の在日西洋人の中で日本語が最も堪能で、しかも日本の事情にも通じているという、貴重な人物であったことは確かであろう。メルメはそこか

ら宣教師の道を諦め、2年半ほど外交官としての義務に従事する間、英・米・蘭・仏四国連合会談に参加したり、日伊条約の交渉の際に通訳として活躍したり、横須賀製鉄所とそれに伴う横浜仏語伝習所の設立に深く携わったりして、栗本鋤雲や小栗上野介、いわゆる幕府の「親仏派」とともに横浜・江戸においても多面的な活躍を見せた。

一方ムニク神父は1825年に南フランスのピレネ山脈に生まれ、1845年にパリ外国宣教会の神学校に入学し、1848年3月に司祭に叙階された。同年5月に、「鎖国」が始まって以来日本に滞在した最初のフランス人の宣教師で後に第1次日本使徒座代理区長（カトリック教会の宣教地域区分）となったフォルカード（Théodore Auguste Forcade, 1816-1885）と共に香港に向ってロンドンから出発した。香港において副代理を務めたが、1856年4月にもう一人の宣教師ルイ・フュレ（Louis Théodore Furet, 1816-1900）と共にフランスの軍艦「コンスタンティヌ号」（Constantine）に乗って、5月20日から25日にかけてフランス人の宣教師として初めて箱館に滞在した。その後、「コンスタンティヌ号」がロシア軍艦¹⁰を追跡してシベリアへと向かい、樺太、韃靼を経て朝鮮半島の海岸も探検して測量し、対馬から上海に戻った。ムニクの『日記』¹¹にはそれらの旅と経験に関する様々な記述が残されており、西洋人による箱館の風景や日本の庶民教育制度についての最も早い描写の一つであると言える。

その後、1856年10月26日以降フュレと共に琉球王国の那覇に滞在したが、二人の新しい宣教師が到着した時点で、那覇には1855年2月26日から既に二人の宣教師のジラルとメルメが滞在していた¹²。ところがムニクとフュレが那覇に着いた次の日、体が弱まっていたメルメが同じ軍艦に乗り組んで香港に戻った。つまり、ムニクがメルメと一緒に那覇で暮らすことはなかったのである。

1859年10月27日まで琉球に滞在したムニクは、日本当局の厳しい監督の影響で、キリスト教布教の活動を発展させることができなかった。日本が開国した後、開港地の一つであった横浜に行くように任命され、1866年まで宣教師というより在日西洋人のための司祭としてそこで務めた。その後長崎に移転し、発見されたばかりの日本の「隠れキリシタン」の世話役を務めた。1868年に、明治維新の最中に宣教師によって長い間放棄されていた箱

館に赴いたが、結局1870年に神戸に移り、副代理に任命されて間もない1871年10月16日に死没した。

二 メルメとムニクによる日本文化に関する著書

1859年11月から箱館に滞在し始めたメルメは、イギリス領事のホジソン（Christopher Pemberton Hodgson, 1821-1865）とともに条約によって定められた遊歩の規程に違反してアイヌの部落を見学・監察することが箱館の役人に許されることがあった¹³。それらの旅の成果として、メルメは *Les Aïnos, origine, langue, mœurs, religion*（『アイヌ—起源、言語、風習、宗教』、Mesnel, 1863年）という書籍を刊行した。日本学・日本語学の揺籃期にその書物を執筆したメルメは、題の「アイヌ」という単語に見られるように、現在一般的に使われているヘボン式ローマ字表記（その場合は *ainu* と表記される）とは違う日本語の表記方法を使用していることが興味深いところである。ところが、日本語の単語が少ないメルメのアイヌに関する記述だけに基づいてローマ字による日本語の表記を分析することは不可能である。

しかし幸いなことにパリ外国宣教会本部宛のメルメ直筆書簡の一通で、「日本のヒエラルヒーに関する研究」（*« Etude sur la Hiérarchie Japonaise »*）と題された史料は日本語を多く含み、それに基づいてメルメの初期日本語表記を分析することが可能かつ有意義になってくるのである。パリ外国宣教会資料室所蔵のメルメに関する資料は、いくつかのファイルに別れて、一つの箱に入っている。それらのメルメ直筆の資料は、自慢話や皮肉が多く、また自分を「文人」（*« homme de lettre »*¹⁴）と意識しているにもかかわらずフランス語の文法や綴りの間違いが非常に多く（「e」と「a」という母音に付けるアクセント符号が見られない場合が圧倒的に多かったり、過去分詞の一致も怠っていたり、単語の綴りも間違っていたりしているなど）、つまり先行研究で評価されているように、とても「文化人」¹⁵らしくはない書簡であるという印象が残る。

まずこの史料の基本情報を探ってみよう。パリ外国宣教会資料室所蔵のメルメ資料群の箱に入っており、更に「P. Mermet - Etude sur la Hiérarchie Japonaise」というファイルの中に挟まっている、34頁からなる自筆のものである。刊行されたものではないし、今のところ先行研究に

において使用された史料でもない。途中から始まっているため(1頁目の左上に«2»という頁数が見られる)、日付も題もないが、形式と文体(「私」と「あなた」「私の友達」という相手とのやりとり)から見ると恐らくメルメがパリ外国宣教会会長の一人であったルセイユ神父に宛てた書簡であると推測できる。ちなみに「日本のヒエラルヒーに関する研究」という題はメルメによるものなのか、それとも資料をまとめた人によるものなのかは不明であるが、文中にはそれらしき表現が確かに出ている。

メルメがいつこの研究を執筆したのかについては、細かい日付は断定できないが、メルメが箱館に滞在した1859年11月から1863年6月頃の間にかかれたものであると見られる。確かに本史料の最後に、「半径35キロの円に閉じ籠められている」¹⁶と述べていることから日本の居留地の状況が浮かんでくるし、また蝦夷地(現在の北海道)に関する記述(相手に蝦夷地の地理を紹介したいことなど)が最初と最後に数多く出てきていることから、箱館という場所が最も適切であると考えられる。

それを裏付ける根拠で更に詳しく推測するのに、本史料の冒頭から役立つ手がかりが幾つか出てくる。先ず「アイノ」(=アイヌ)のことで、それも箱館説を裏付けるものであろう。更に、アイヌに尊敬されている人物が紹介されており、「Takeno ootchi」という名前から、竹内下野守保徳のことであると思われる。この人物は安政元年(1854)に勘定吟味役から箱館奉行に任命され、文久元年(1861)に勘定奉行兼外国奉行になった者である。箱館奉行時代には幕府の命令に逆らって、アイヌに髪の毛を刈ることを免除したことや、彼のお陰で漁がとても豊富になったことでアイヌの尊敬の対象となった、という逸話のような話も伝わっているという。しかしここでは箱館奉行、勘定奉行や外国奉行としてではなく、文久2年(1862)にヨーロッパへ派遣された遣欧使節(«cette mission Japonnaise (sic)», 「その日本使節」)の正使として紹介されているのである。また、同じ使節に同行したもう一人の日本人の名前が現れている。それは«Tatchi Kousakou»つまり立広作という人物で、箱館のフランス語学校におけるメルメの生徒であった¹⁷。

文中には、「使節」(«mission», «embassades (sic)»¹⁸)という言葉が出て来ていることから、メルメは幕府から近代化政策の一環として欧米に派遣された日本の使節が

フランスを訪れた際に生じ得る、儀礼等に関する様々な問題を解決するためにこの「日本のヒエラルヒーに関する研究」を作成したと主張している。特にフランス政府の客である幕府の使節の構成員の位が分からないと、適切な応接ができかねることが挙げられている。日本に関する知識をほとんど持っていないフランス人が来仏の日本使節をある程度理解するために、つまり教育的かつ外交的な目的を以て執筆にあたったようである。恐らく出版されるための物ではなく、「あなたの友達達」(«vos amis»)つまりパリ外国宣教会会長との関係をもちえた上級社会の人々を相手にこの書簡を書いたのであろう。

要するに、メルメは竹内下野守が率いる遣欧使節が品川を出帆した1862(文久2)年1月21日より以前か、同使節が品川に帰港した1863年1月29日までの間にこの書簡をフランスに送ったと推測できる。以上の目的からすると、恐らく遣欧使節がフランスに到着するまでに届くように作成したとも言えよう。

一方では、ムニクも日本に関する興味深い著書を残している。それは«Mythologie Japonnaise»(「日本の神話」)と題された書物で、*Revue de l'Orient, de l'Algérie et des Colonies*(『東洋、アルジェリアと植民地誌』、第15巻)という雑誌の1863年1～6月号に収められた記事である。以上のメルメの記述と違って刊行物になっているが、いずれも日本語に訳されていないと思われる。フランスにおける日本学の先駆者レオン・パジェス(Léon Pagès, 1814-1886)による紹介のあと、ムニクの書簡によるその作業の意義・過程に関する説明、そして本題、といった構造になっている。この「日本の神話」をまとめてフランス語に翻訳してフランス人に紹介したムニクは、日本人の哲学・形而上学に対する劣等、中国に対する古代からの文化依存、そして「ミカド」の王朝の祖である神武天皇は実は孔子にほかならないという説、を証明しようとしていると述べている。

本文は26ページで第1巻から第3巻まであり、『日本書紀』¹⁹の最初の三巻に沿って「天地開闢」から「神武天皇」までの日本の神話を中心に詳しく述べているものである。ローマ字表記法のせいではなかなか分かりづらい名称も幾つかあるが、ほとんどの場合はかなり正確で細かい記述となっている。

両方の資料は1863年頃に執筆されたもので、いずれも

1867年に刊行されたヘボンの『和英語林集成』（和英辞典）より早く発表されているものである。しかも両方とも日本の社会の根本的な要素である政治的構造と神話できるだけ細かく紹介しようとしているところに類似点を見出すこともできる。それらの資料のローマ字による日本語表記を分析することで、英語圏のヘボンとは異なる、私人宣教師がフランス語の特徴を取り入れた、独特のローマ字表記法を見出して紹介したいと考えている。

三 日本語表記について²⁰

①母音

最も簡単な母音 [a] についてはなんの問題もないので、まず [u] という発音を見てみよう。フランス語では [u] という発音は必ず «ou» と書くので、ムニクもメルメも基本的に «ou» という表記を使用している。例えばメルメは「組（くみ）」をヘボン式のように «kumi» という綴りではなく、「koumi» というふうに表記している。また「奉行（ぶぎょう）」を同じく «bougniô» と書く場合も多い。ムニクの場合は、「筑紫（つくし）」を «Tseukouchi», 「大日貴雲神（おおひるめのむちのかみ）」を «Oho-hirou-me-no-moutchi» と記し、基本的に «ou» で統一している。ところがメルメが「油漆奉行（あぶらうるしぶぎょう）」を «abouro (sic) -ourouchi-boogniô» と記している例からは、いくつかの情報を英語話者又は英語の著作から受け取ったことが窺えよう。日本語の [u] を英語風に改めると «oo» と書くので、メルメの原稿におけるその «oo» の存在が英語の影響を示している。また、「貝吹頭（かいふきかしら）」を «kaï-hooki-kachira» と書いているのもその一例である。ところが、メルメもムニクも «oe»（オランダ語では [u] と発音される母音の組み合わせ）という表記を使用していないのは、オランダ語の史料・話者からの情報を得なかったのか、それともそれらの言葉を別の方式に改めたということの意味するだろう。

また、[e] については、メルメは «Kane bougniô»（「金奉行（かねぶぎょう）」）や «saki-te-teppô Kachira»（「先手鉄砲頭（さきててっぽうかしら）」）のように基本的に «e» と書いているが、語尾には «et» と書いてある一例がある。確かに文中では一ヶ所を除いて全ての場合に

「目付（めつけ）」は «Ôo metsooket»（「大目付（おおめつけ）」）のように «metsooket»（または «metsouket» や «metsket»）となっている。ところが、フランス語では語尾に来る «et» という文字の組み合わせが [e] ではなく [ɛ] と口を開けて発音されるので、メルメは日本語話者から直接に [metsuke] ではなく [metsukɛ] と聞いてそのように筆記したのではないかと思う。ただし当時一般的にそう発音されていたのか、どこかの方言の話者がそう発音していたのか、それともメルメの耳にはそう聞こえたのかは分からない。ムニクの場合は、「Ama-tseuhiko-né»（「天津日子根命（あまつひこね）」）や «Sarouméné-no-kimi»（「猿女君（さるめのきみ）」）のように、フランス語らしく [e] を «é» と表記するケースが多いが、「e» 表記も無視できるわけではない（「け」の16.7%、「て」の75%）。しかし、ムニクの原稿を今のところ手に入れていないので、その «é» はムニクによる表記なのか、それともフランス人の読者を考えた上でそのように改めたパジェスなどの提案なのかは不明である。

一方、フランス語では区別しない長母音に関しては、メルメがヘボン式と同じように表記しているのが注目すべき点である。つまり、長くのばす母音の上にマクロン符号をつけているのである。例えば、「御大老（ごたいろう）」を «gotai-rô», 「側用人（そばようにん）」を «soba iônin», つまり現在と似たような方式で表記している。ムニクの史料からは逆に長母音をほとんど見ることができない。よく表れて必ず区別しているのは、「おお」（«oho», 91% / «oo», 9%）のみである。というわけで、それらの長母音は必ずしも適切に使われているのではなく、メルメは「書院番頭（しょいんばんがしら）」を «Chôinbangachira» と記しているように、必要のない時にも母音をのばしたり、「小姓組番頭（こしょうくみばんがしら）」を «Kochô-koumi-bangachira» や「鉄砲役人組（てっぽうやくにんくみ）」を «Teppo-iakounin-koumi» と記しているように、長母音を忘れていたりしていることもある。単なる写しの間違いなのか、それともそう読んだり聞いたりして筆記したのかは残念ながら不明である。

②半母音（「や」・「わ」行）

現在の「や・ゆ・よ」をローマ字に引き換える時に、基本的に «y» を使うが、フランス語話者のメルメがそ

の原稿を書いた当時は、「y」より圧倒的に「i」を使用している。例えば、「側用人」を「*Soba-yōnin*」ではなく「*Soba-iōnin*」、「奉行」を「*bugyō*」ではなく「*boogniō*」「*boognio*」「*bougniō*」、更に「弓頭（ゆみがしら）」を「*yumi gashira*」ではなく「*ioumi-gachira*」、「林奉行（はやしぶぎょう）」を「*hayashi bugyō*」ではなく「*haiachi-bougniō*」と書く時に、半母音の [ja] [ju] [jo] を完全に二つの母音として記していることとなる。つまり、フランス語話者の読者がそれらの言葉を読んだ時に、必ずしも [j] という半母音で発音するとは限らず、「母音+母音」（例えば「そばようにん」を「そば・いおうにん」と読んでしまうように）と分けて発音する可能性もある。一方、「詩を読む人（うたをよむひと）」を「*uta (w)oyomu hito*」ではなく「*outa o iomou hito*」、「槍奉行（やりぶぎょう）」を「*yari bugyō*」ではなく「*iari-bougniō*」と記す時に、フランス語独特のアクセント符号を使って半母音を表記しようとする場合もあるが、その方式は相応しい問題解決になりえるとは言え、統一されていないのでその段階ではまだ検討中だったということであろう。ところがムニクの資料には、「y」という表記が圧倒的に多く使われ、フランス人の読者にとって不思議な文字と言っても、発音的には正しいと考えられていただろう。

ちなみに、この史料から何ヶ所か出てくる「江戸」の表記についても言及する価値があると思う。現在ではローマ字に引き換えると「*Edo*」と書くのが一般的であるが、メルメ（とは限らず当時の多くの西洋人も）は、基本的に「*Ieddo*」²¹と記している。つまり以上の半母音の表記の問題を考えてみると、「エ」= [e] ではなく [je] という発音に引き換えようとした訳で、江戸を [jedō] と発音していた幕末の人々が多かったのではないかという推測ができる。更にムニクの資料からも同じことを言うことができ、「戊午（つちのえ）」を「*Tseutchi-no-yé*」や「兄磯城（エシキ）」を「*Yé-chiki*」又は「*Jé-chiki*」と記しているのは、[je] のように発音されていたからだと考えられる。

一方、「わ・を」の表記はどうなっているのだろうか。以上に載せた例（「*outa o iomou hito*」）や、「碁を打つ（ごをうつ）」を「*go o outsou*」と記している例から、メルメは助詞の「を」を基本的に「o」と表記し、それは当時既に [wo] ではなく、現在のように [o] と発音されてい

たことを示していると思われる。また、「若年寄（わかどしより）」を「*ouaka-dochi iori*」、「学問所世話役頭取（かくもんじよせわやくとうどり）」を「*gakoomongiō cheouaiakou tōdori*」、と記していることは、以上に見た半母音 [j] の場合と同じような問題、つまりフランス語話者がそれらの表記を「母音+母音」（ここで [u] + [a]）と分けて発音する恐れがある、ということをもたらし得るのである。ムニクも「*Kami-nou-na-kaoua-mimi*」（「神淨名川耳尊（かむぬなかわみみのみこと）」）や「*Oua*」（「倭（わ）」）のように同じ「*oua*」という表記を使っている。しかし逆に、二人ともフランス語独特の表記である「*oi*」= [wa] を利用していないのが、「*ou*」= [u] の場合と対照的で、疑問に残る点である。フランス語の「*oi*」という組み合わせが母音の後に現れないからその使用を避けたのかも知れない。

更に、当時の日本語の発音に関して興味深いこととして、メルメは「玄関番（げんかんばん）」を「*genkouanban*」、「関白（かんぱく）」を「*Kouanpakou*」、また「外国奉行（がいこくぶぎょう）」を「*Gouai-kokou-bougniō*」、「口科（こうか）」を「*kō-kuā*」と表記していることが挙げられる。つまり、以上の半母音 [w] の問題と関連して、幕末期には「関」や「外」という漢字が [kan] [gai] ではなく [kwan] [gwai]（元の中国語の発音に近いもので、『大漢和辞典』等にも、「クワン」「グワイ」という発音が記載されている）と発音されていたこともあったと推測できる。

③鼻母音

現在の日本語の標準語には、鼻母音というものが基本的には存在しないが、例えば助詞の「が」を強調したりする時に [ga] ではなく [ŋa] ([ŋ] というのは、英語の動詞の語尾の「*ing*」の「*ng*」という発音を指すものである）と発音することもある。幾つかの方言にも存在する発音でもある。メルメの史料における表記から、幕末期にその発音が使われていたのではないかという推測ができる。メルメが「奉行」を「*boogniō*」「*boognio*」「*bougniō*」と表記しているのはその証拠であろう²²。その裏付けに、メルメの違う書簡で「長崎（ながさき）」が「*Nagasaki*」ではなく「*Nangasaki*」²³というふうに表示されていることもあり、それも [ŋ] という発音が使われて

いたからなのではないかと思う。逆に、ムニクは「Hiko-ho-gni-gni-ki」(「ヒコホノニニギ」)や「San-mo-gniou-no」(「三毛入野命(みけいりのみこと)」)のように、「に」をほとんど「gni」と表記しており、それも[ni]ではなく[jni]と聞こえていたからだと窺える。

④子音

母音と同じように、子音の表記も現在一般的に使われているヘボン式ローマ字と異なるものが多く、それらにもフランス語話者であるメルメとムニクの日本語表記に対する試行錯誤が現れていると言える。例えば、メルメが「御老中(ごろうじゅう)」を「Go-rōgiou」、「儒者(じゆしゃ)」を「gioocha」、「高家衆(こうけしゅう)」を「Kōkechiou」、「御勘定奉行(ごかんじょうぶぎょう)」を「Gokangiō boogniō」と書いているのは、以上の半母音[j]の問題と関連して、「し」・「じ」・「ち」(この史料に現れていないが同じだと推測できよう)・「ち」+「や」「ゆ」「よ」の表記が音声学的に一貫していなかったことを示しているだろう。それらの表記をフランス語の特徴を利用して考えていたことも明らかである。つまり、日本語の「じ」(と「ぢ」)を基本的に「g」で記しているが、その結果フランス語話者によっては日本語のように[dʒ]ではなく[ʒ]と発音されることが確実であろう。「作事奉行(さくじぶぎょう)」を「Sakoo-gi boognio」と表記すると、フランス語話者はそれを[sakudʒi]ではなく[sakuzi]と読んでしまうに違いない。しかし日本語の発音に近づけようとする場合もある。メルメが「掃除頭(そうじがしら)」を「sōdgi-gachira」、「大臣(だいじん)」を「Dai dgin」、「駿河の城代(するがのじょうだい)」を「Sourougano dgiōdai」、ムニクが「磯城(しきじょう)」を「Chiki-dgio」と記すような例である。フランス語で「dg」は確かに日本語の[dʒ]に近い発音で発音されるが、メルメがムニクと違ってなぜその表記で統一しなかったのかは謎である。当時の日本人がそれらの[dʒ]と[ʒ]という音を区別して発音していた可能性もあるのだろうか。

また、「し」+「や」「ゆ」「よ」の場合でも同じ問題が生じ、メルメとムニクはそれらをヘボン式の「sh」ではなく、基本的に「ch」で表記している(メルメの「高家衆」「Kōkechiou」、「頭」「kachira」・「gachira」、「医

者」「icha」、ムニクの「Aki-tseu-chima」(「秋津州(あきつしま)」、「Ten-ouo-chin-mou」(「天王神武(?)」など)。フランス語では「sh」という文字の組み合わせは外来語(主に英語)以外に存在せず、「ch」というのは英語と違って[tʃ]ではなく[ʃ]と発音されるのである。その意味では、以上の表記を「ch」で統一することによって、フランス語話者にとっても日本語に近い発音が予想される。ところが、全ての[ʃ]が「ch」で統一されている訳ではなく、メルメの資料の何ヶ所かに「xi」で記されていることもある。例えば、「小姓組番頭格(こしょうくみばんがしらかく)」を「Kochō-koomi bangaxira kakou」、「腰の物奉行(こしのものぶぎょう)」を「Koxino mono boogniō」と記しているのはその例である。この表記によって、メルメがポルトガル語かスペイン語の資料・話者からの情報を得たのではないかと推測できる。ポルトガル語とスペイン語では「x」は確かに[ʃ]と発音される場合があり、『日葡辞書』等を参考にした可能性もあると言えよう。

以上のことから、「ち」の[tʃ]の発音がヘボン式の「ch」ではなく、フランス語に相応しい「tch」になっているのは当然であろう。メルメが「町奉行(まちぶぎょう)」を「matchi boognio」、「徒の頭(かちのかしら)」を「katchino kachira」、ムニクは「タケミカツチ」を「Take-mika-tzeutchi」と記しているのはその例である。ただしメルメは[tʃi]を「tki」と表記する例が何ヶ所かある(「徒目付組頭(かちめつけくみがしら)」を「katkimetske koomi gachira」、「徒目付(かちめつけ)」を「katki metsket」、「提灯奉行(ちょうちんぶぎょう)」を「tkiōtkin-boogniō²⁴⁾」が、不思議な表記でその理由は今のところ不明である。

他方では、フランス語の特徴を念頭に置きながら考えた表記として、[g]と[s]の問題もある。前者は、ヘボン式表記の場合は、「g」で表すが、フランス語では「g」という文字が後ろに来る母音によってその発音が変わるので(「g」+「a/o/u」=[g]、しかし「g」+「e/i/y」=[ʒ])、日本語を記す時は注意する必要がある。メルメとムニクはその問題を解決するために、フランス語で慣用されている、「gu」=[g]という文字の組み合わせを利用して。その結果、メルメは「表番外科(おもてばんげか)」を「omote ban-gueka」、「公家(くげ)」を「Kougué」、「勘

定吟味役 (かんじょうぎんみやく)」を「*Kangiô guinmi iakou*」、ムニクは「イザナギ」を「*I-za-nagui*」というふうに記している。

もう一つの問題は [s] という発音である。フランス語では、母音の間に挟まれた「s」は [z] と発音されるのにもかかわらず、メルメはここでヘボン式と同じ方式を選択した。つまり、「少佐 (将佐? しょうさ)」を「*Chôsa*」、「留守居 (るすい)」を「*roussoui*」と記している。当時のフランス語話者はそれらを [ʃo:sa] や [rusui] ではなく、きっと [ʃo:za] [ruzui] と読んでしまったに違いない (現在もオートバイで有名な「*Kawasaki*」という会社名はフランスでほとんど [kawazaki] と発音されている)。しかしメルメの史料の最後の方に出てくる言葉では、[s] の発音がフランス語らしき「ss」という文字の組み合わせで表記されている。つまり、「留守居番 (るすいばん)」を「*roussoui-ban*」、「二の丸留守居 (にのまるるすい)」を「*nino maru roossoui*」、「大坂町奉行 (おおさかまちぶぎょう)」を「*Ossaka matchi-bougniô*」、「長崎奉行 (ながさきぶぎょう)」を「*Nagassaki bougniô*」と記しているのである。フランス語話者は逆にそれらを日本語と同じ発音で読んだと推測できる。ところがムニクの場合は、母音の間でも「*Naki-saoua-me*」(「泣沢女神 (なきさわめ)») のように必ず「s」で [s] という発音を表記している。ここにもメルメの日本語表記に対する試行錯誤、そしてムニクの安定した表記法が現れ、しかも二人とも恐らくフランス語話者ではない西洋人の日本語表記に影響を受けたことも推測できよう。

ヘボン式と違う例として、「ふ」の表記もある。ヘボン式の場合は、「ふ」は「*fu*」と表記されているが、「*hu*」という表記も現在ではよく見られる。メルメは後者を選択し、「普請奉行 (ふしんぶぎょう)」を「*hooching bougniô*」(濁音にも注意して「小普請奉行 (こぶしんぶぎょう)」を「*Ko-bouchin-bougniô*」と記している)、「船手頭 (ふなてかしら)」を「*hoona te kachira*」、「船改役 (ふねあらためやく)」を「*hoone-aratame-iaikou*」、「貝吹頭 (かいふきかしら)」を「*kaï-hooki-kachira*」と記している。しかしフランス語では「h」は発音されないので、フランス語話者はそれらの言葉を日本語と違う発音で読んでいただろう。ここでは、次に出てくる [u] の表記(「*oo*」)を考えると、英語式のローマ字表記に影響を受

けたのではないかと推測できる。逆にムニクは「ふ」を必ず「*fou*」と表記し、現在のヘボン式に近い使い道でありながら、フランス語の特徴も表れている。また、フランス語では発音されない「h」の問題と関連して、メルメが「浜御殿 (はまごてん)」を「*amagaten*」と記するのはフランス語話者の特徴であろう。これも単に書き写しの間違いなのか、それとも [h] という冒頭の発音が聞き取れなかった問題なのだろうか。

⑤幕末の発音・漢字の読み方

最後に、二人の宣教師の史料を通じて、幕末期の日本語の発音について、以上で見た例の他にいくつかの例を挙げよう。『日葡辞書』が戦国時代・江戸初期の日本語の発音について色々な情報を提供してくれると同様に、メルメとムニクの著作から同じような情報がある程度得られると考えられる。例えば、辞書を調べてみると「蕃書調所」は「ばんしょしらべしょ」というふうに発音されているが、メルメは「蕃書調所頭取 (ばんしょしらべしょとうどり)」を「*banchô-chirabé-tokoro-tôdori*」と記している。「所」という漢字を勝手に「ところ」と読んだ可能性もあるが、「ところ」と聞いてそのように書いたという説も捨て難いであろう。また、二ヶ所で「小人」を [kobito] ではなく [kubito] と記していることもあり(「小人頭 (こびとかしら)」を「*koobito kachira*」と「小人目付 (こびとめつけ)」を「*koubito metsouket*」)、そういうふうに聞いて筆記したのではないかと思われる。逆に、ムニクが「日向 (ひゅうが)」を「*Nitchi-kao*」、「五瀬命 (いつせのみこと)」を「*Go-ray*」と書き出すのは、何かの漢字の読み方の間違いというふうに推測できよう。

更に、「つか」・「つけ」という文字の組み合わせがメルメによって「*tsuka*」・「*tsuke*」ではなく「*tska*」・「*tske*」と表記されることがあり(「使蕃 (つかいばん)」を「*Tskaï-ban*」、「盗賊火付改役 (とうぞくひつけあらためやく)」を「*toôzokoo-hitske-aratame-iaikoo*」、「徒目付組頭 (かちめつけくみがしら)」を「*katkimetske koomi gachira*」、「徒目付 (かちめつけ)」を「*katki metsket*」)、それも恐らく当時のメルメの相手が [tska]・[tske] と発音していたからだと言えよう²⁵。しかしそれもまた統一されておらず、「大目付」を「*Ôo metsooket*」、「御目付 (おめつけ)」を「*o-metsooket*」と記していることから、何

人かの日本人を相手にしたか、それともいくつかの書籍から情報収集を行ったのではないかと推測できる。同じような現象をムニクの文章からも見出すことができるが、ムニクの場合は「す」「つ」「ず」「づ」の諸文字をそれぞれ「seu」「tseu」「zeu」「tzeu」「dseu」というふうに、つまり [u] とは違う発音だということを意識しながら表記しているわけである。確かにフランス語では「eu」という文字の組み合わせが [ø] という発音になるので、口が [u] のように丸くならないという意味で日本語のサ行とタ行における「ウ」との組み合わせの発音に近いとも言えよう。どちらの方法にしても、二人の宣教師の日本語の発音に対する細かい観察を読み取ることができると言える。

おわりに

メルメの「日本のヒエラルヒーに関する研究」とムニクの「日本の神話」を通じて、日本語学のあけぼのに貢献した二人の宣教師の日本語表記に対する試行錯誤を分析してきた。その分析によって、メルメが幕府に関する細かい情報をどこから集めてきたかということについて、少し明らかになったと思う。その日本語表記を見ると、英語・ポルトガル語かスペイン語のように、様々な影響が表れ、更にいくつかの口語的な表記から直接に日本人に情報を受けたのではないかと推測できる。一方ムニクは、完成度の高い表記法を使っており、メルメのそれに比べて更にフランス語の特徴に従い、他の西洋の言語の影響を感じさせることができない。

ところが、英語以前の国際共通語であったフランス語に基づいた、独特のローマ字表記が（その成果をまとめてみると表②のようなものになり得るとされる）このように日本の開港期に制度化され始めたが、イギリスとアメリカの外交・貿易政策によって既に優先的な地位を獲得しつつあった英語に基づいた表記法が早い段階で広まり、「フランス式」の表記法がそれほど発展しなかったように思える。

また、当時の他の西洋人の書籍に比類のないメルメの詳細な幕府職名の一覧表によって、幕府が非常に発展・近代化した官僚制として我々の目に映ると言える。当時から洗練された文明国として紹介されていた日本は、政

治的・行政的にも非常に洗練された、西洋諸国に劣らない社会であったということ、メルメの報告を通じて理解できるのではないだろうか。また、ムニクの意図に反して「日本の神話」も日本文化の豊かさを紹介しているものとして評価できるのではないかと思う。宣教師の日本学・日本語学への影響をこれらの書籍から窺うこともできるのではないだろうか。

(Endnotes)

- 1 *Le livre de Marco Polo : citoyen de Venise, conseiller privé et commissaire impérial de Khoubilai-Khaân / rédigé en français sous sa dictée en 1298 par Rusticien de Pise, Firmin Didot frères, fils (Paris), 1865* (マルコ・ポーロ『東方見聞録』)
- 2 しかし京都へは10里まで近づくことが許されていた。
- 3 メルメの苗字について色々と議論されてきたが、出生時の姓は *Mermet Cachon* だったようである（西堀昭「メルメ・ド・カシオン（1828-?）と日本のフランス語教育（資料）」『千葉商大紀要』、14号、1976年を参照）。しかし東アジアにおいて活躍を展開したメルメは、フランスの貴族風の苗字を名乗り始め、少なくとも1859年11月からメルメ・ド・カシオン（*Mermet de Cachon*）という苗字を使っている（パリ外国宣教会資料室所蔵、1859年11月18日付、エームリ（*Aymeri*、上海におけるラザール修道会館長）神父宛の書簡）。
- 4 病院が本当に設立されたかどうかについては、疑いの余地がある。
- 5 栗本鋤雲『匏庵遺稿』を参照。
- 6 パリ外国宣教会資料室所蔵、1864年5月3日付横浜よりパリ外国宣教会会長リボア（*Libois*）・ルセイユ（*Rousseille*）宛の書簡。
- 7 鳴岩宗三『幕末日本とフランス外交』、49頁。
- 8 パリ外国宣教会資料室所蔵、1864年1月30日付、ルセイユ神父（?）宛の書簡。
- 9 パリ外国宣教会資料室所蔵、1864年5月3日付、リボア神父・ルセイユ神父等宛の書簡。
- 10 当時ヨーロッパで行われたクリミア戦争の東アジアへの発展であった。

- 11 « Father Mounicou's Bakumatsu diary », translated with an introduction by Paul C. Blum, Tokyo : Asiatic Society of Japan, 1976, 227 p., *The Transactions of the Asiatic Society of Japan*, 3rd ser., v. 13.
- 12 フュレも1855年2月26日に他の二人の宣教師と共に那覇に着いたが、同年5月7日に通訳としてフランス軍艦に乗り組んで長崎を訪れた。しかしフランス人の上陸は許されなかった。
- 13 ホジソン : *A residence at Nagasaki and Hakodate in 1859-1860*, Richard Bentley, 1861年を参照。
- 14 1861年8月24日付の書簡。西堀昭(『日仏文化交流史の研究』、駿河台出版社、1981)と富田仁(『メルメ・カション : 幕末フランス怪僧伝』、有隣堂、1980)のイメージと一致する自意識である。
- 15 富田仁『メルメ・カション』。
- 16 « (...) confiné comme je le suis dans un cercle de 35 kilomètres de rayon », 34頁。
- 17 西堀昭、富田仁を参照。
- 18 メルメが« *embassade* »と書くのは誤りであり、英語の« *embassy* »とフランス語の« *ambassade* »が混乱したようである。これもまた「文人」らしい綴りとは言えない。
- 19 本文の出来事の順番や神々の呼称によって、ムニクは『古事記』ではなく『日本書紀』に沿っていることが窺える。
- 20 以下の[]の間の記号は、国際音声記号に基づく、発音を示したものである。また、問題となっている表記に下線を引くことにした。表①を参照。
- 21 ところが1858年の日仏条約では、江戸が« *Yédo* »と表記されている。その手本になった日英条約の影響なのではないかと考えられる。
- 22 « *gn* »という文字の組み合わせはフランス語で基本的に[ɲ] (日本語の「にゃ」「にゅ」「にょ」の最初の子音の発音) というふうに通音されるが、19世紀半ばには英語の« *ing* »という語尾が未だフランスに普及しておらず、メルメは[ɲ] を表記するために[ɲ] と同じ表記を選んだのではないかと考えられる。
- 23 ジラルールの書簡にもその表記が確認される(香港より、1855年8月27日付の書簡、パリ外国宣教会資料室所蔵)。
- 24 もう一ヶ所にその表記が見られるが、それは« *Kobootkiô bougniô* »という表現で、「講武所奉行」と推測すると、更に不思議な表記としか考えられない。
- 25 日本語の[u] が[s] の後に抜けやすい例として、第一次米領事ハリスの次の証言もある。通詞の森山栄之助(後に多吉郎、1820-1871)の名前が[*ejnosuke*]ではなく[*jenoski*]と記されているのである。「*Moriama informs me that he was promoted one step when last at Yedo, and has a place in the Revenue Board. He says his name is now changed to Moriama Tatsitsio, in place of Moriama Yenosky (...)*」(HARRIS, Townsend, *The Complete Journal of Townsend Harris* (Doubleday, 1930)), p. 322.

幕末期に来日した二人の私人宣教師の日本語ローマ字表記について

表1 ローマ字表記の比較

仮名書き	ヘボン式	訓令式 (日本式)	メルメ式	ムニク式
あ い う え お/おお	a i u e o/ō	a i u e o/ô	a i (56.7%) i (43.3%) ¹ ou - o / -	a i (55.5%) y (37.8%) j (6.7%) ⁷ ou - o / oho (91%) oo (9%)
か き く け こ/こう	ka ki ku ke ko/kō	ka ki ku ke ko/kô	ka ki kou (63%) koo (37%) ke (44.5%) ket (55.5%) ² ko (93%) co (7%) ³ / kō (2/2)	ka ki kou ké (83.3%) ke (16.7%) ko (95%) co (5%) / kao (1/2) kaô (1/2) ⁸
きゃ/くわ きゅ きょ/きょう	kya/kwa kyu kyo/kyō	kya/kwa kyu kyo	kua (1/1) - kiō (2/2)	- - -
が ぎ ぐ げ ご	ga gi gu ge go	ga gi gu ge go	ga gui (1/2) guī (1/2) goo (1/1) gue (66.7%) ge (33.3) ⁴ go	ga gui gou - go
ぎょ/ぎょう	gyo/gyō	gyo/gyô	- / gniō gniō ⁵	-
さ し す せ そ/そう	sa shi su se so/sō	sa si su se so/sô	sa ssa (母音の間) chi (94%) xi (6%) sou che so (1/1) / sō (1/1)	sa chi seu ché (2/3) che (1/3) so
しゃ しゅ/しゅう しょ/しょう	sha shu/shū sho/shō	sya syu/syū syo/syô	cha chou (1/1) / chiou (2/2) cho / chō	- - - / chio
ざ じ ず ぜ ぞ/ぞう	za ji zu (dz) ze zo/zō	za zi zu ze zo/zô	za (1/1) dgi (3/4) gi (1/4) - ge (1/1) zo / zō (1/1)	za dgi zeu (1/1) dge (1/1) -
じゅ/じゅう じょ/じょう	ju/jū jo/jō	zyu/zyū zyo/zyô	gioo (2/2) / giōū (1/1) gio (1/3) dgio (1/3) giō (1/3) / giō (83.3%) dgiō (16.7%)	- - / dgio
た ち つ て と/とう	ta chi tsu (tsz) te to/tō	ta ti tu te to/tô	ta tki (55.5%) tchi (44.5%) tsou (46%) tsoo (23%) ts (31%) ⁶ te to/tō	ta tchi (97%) chi (3%) ⁹ tseu té (25%) te (75%) ¹⁰ to
ちゅ/ちゅう ちょ/ちょう	chu/chū cho/chō	tyu/tyū tyo/tyô	- / tchiou (1/2) tkioo (1/2) - / tkiō (2/2)	- / tchiou (1/1) -
だ づ で ど/どう	da (zu) (dz) de do/dō	da zu (du) de do/dô	da dzou (1/2) dzoo (1/2) - do / dō (1/1)	da tzeu (2/3) dseu (1/3) dé do
な に ぬ ね の/のう	na ni nu ne no/nō	na ni nu ne no/nô	na ni - ne no / -	na gni (88%) hni (6%,1) ni (6%,1) nou né no / -
にゅ/にゅう	nyu/nyū	nyu/nyū	-	- / gniou (1/1)
は ひ ふ	ha hi fu	ha hi hu	ha hi hoo	ha hi fou

へ ほ/ほう	he ho/hō	he ho/hô	- - / hō (1/1)	hé ho
ひゅ/ひゅう ひょ/ひょう	hyu/hyū hyo/hyō	hyu/hyû hyo/hyô	- - / hiō	- / hiou -
ば び ぶ べ ぼ/ぼう	ba bi bu be bo/bō	ba bi bu be bo/bô	ba bi bou (76%) boo (24%) be (1/2) bé (1/2) - / bō (1/1)	ba bi bou (1/1) bé -
ぱ ぽ/ぽう	pa po/pō	pa po/pô	pa (1/1) - / po (2/3) pō (1/3)	pa (1/1) -
ま み む め も/もう	ma mi mu me mo/mō	ma mi mu me mo/mô	ma mi mou (1/1) me mo / -	ma mi (86%) mmi (14%) ¹¹ mou mé (80%) me (20%) mo / -
や ゆ [え] よ/よう	ya yu ye yo/yō	ya yu (e) yo/yô	ia (92%) iā (8%) iou (2/3) ioo (1/3) - io (1/2) iō (1/2) / iō (2/2)	ya (93%) ia (7%) you yé (87.5%) jé (12.5%,1) yo (57%) io (43%)
ら り る れ ろ/ろう	ra ri ru re ro/rō	ra ri ru re ro/rô	ra ri rou (71.4%) roo (14.3%) ru (14.3) re (1/1) ro (2/2) / rō	ra ri rou ré (66.7%) re (33.3%) ro
わ ん	wa n m	wa n	oua (3/3) n	oua n (94%) m (6%,1) ¹²

メルメの *Etude sur la Hiérarchie japonaise*、ムニクの *Mythologie japonaise* と間宮不二雄「我国のローマ字綴りに就いて」(『図書館界』、1965年10月、87号)、高谷道男「へボン博士の偉大なる功績」(『標準式ローマ字制定70周年記念講演集』、昭和32年)より作成。便宜上、史料に現れていない行を削除した。%の次に出てくる「1」は、この表記が一箇所にしかないということを意味するものである。

備考

1. 「子音+a+i」の表記は、半分ずつ“ai”と“ai”が用いられている。また、“i”表記の77%を「あい」、残りの23%を「すい」が占めている。
2. “ket”という表記は「目付」の語尾にしか表れなく、「目付」表記の83%を占めている。
3. “co”は「箱館」の表記(1ヶ所)にしか表れない。
4. 同じ表記“ge”は、もう1ヶ所に「ぜ」にあたる。
5. “gnio/gnió”の表記は「奉行」にしか表れず、その100%を占めている。
6. “ts”という「つ」の表記は、[k]という子音の前にしか表れない。
7. “y”という表記は基本的に二重母音(“oy”, “ay”, “ey”)や単語の冒頭に表れる。“j”は“Joua”(いわ)という単語にしか出て来ない。
8. “kao”と“kaô”はいずれ「日向」(ひゅうが)の「向」を音読みした時に使われる表記である。
9. “chi”は「血」の訓読みを表す時に一ヶ所のみに使われている。
10. “te”は「天」の音読みを表す時に、即ち「ん」(“n”)の前にしか表れていない。
11. “mmi”は「タカミムスピノカミ」(“takammi mouseubi”)にしか使われていない。
12. “m”は「難波」(「なにわ」を「なんば」“nampa”と読まれている)の一ヶ所のみに使われている。

幕末期に来日した二人の仏人宣教師の日本語ローマ字表記について

表2 「フランス式」ローマ字表記

	あ	い	う	え	お
ø	a	i	ou	e é	o
k	ka	ki	kou	ke / ké	ko
g	ga	gui	gou	gue / gué	go
s	sa	chi	sou / seu	che / ché	so
z	za	dgi	zeu	dge / dgé	zo
t	ta	tchi	tsou / tseu	te / té	to
d	da	dgi	dzou / tzeu	de / dé	do
n	na	ni	nou	ne / né	no
h	ha	hi	fou	he / hé	ho
b	ba	bi	bou	be / bé	bo
p	pa	pi	pou	pe / pé	po
m	ma	mi	mou	me / mé	mo
y	ya / ia		you / iou	ye / yé	yo / io
r	ra	ri	rou	re / ré	ro
w	oua				
n	n				

メルメの *Etude sur la Hiérarchie japonaise*、ムニクの *Mythologie japonaise* より作成。

備考

長母音はアクセント符号 (´) で表すのが最も適切であろうが、「おお」は” oho” か” oo” になっている。

Romanization of Japanese used by two French missionaries residing in Japan at the end of the Edo period

Le ROUX Brendan*

From 1858, French missionaries were allowed to reside in the newly open ports of Japan (i.e. Hakodate, Kanagawa, Nagasaki, later K[?]be and Niigata), though they were still not able to propagate Christianity. Having learnt Japanese at Okinawa or Hong-Kong, they began to collect information about Japan, its culture and traditions, as they were forced to engage in activities other than those for what they had come so far away from their motherland.

Father Mermet, well known for his good relations with Bakufu officials Kurimoto Jo.un and Oguri K[?]zukenosuke and for his important role as a “pipeline” between the Bakufu and French Minister L[?]on Roches during the last days of the Shogunate, happened to write two articles during his first sojourn in Hakodate (November 1859 ? June or July 1863), one about the “Ainus” of Hokkaid[?], whom he was able to visit thanks to the governor of Hakodate and to the English consul, and the other about the hierarchy of the Japanese Bakufu.

On the other hand, less-known Father Mounicou, arrived at Yokohama at the end of 1859 after having spent three years in Naha, wrote an article about the Japanese mythology, following the three first books of the “Nihon-shoki”, from the creation

of the world until Jinmu-tenn[?]. Mermet’s latter text and Mounicou’s article are dated back to 1863, and both represent a well-documented attempt to show Japan to Europe from an insiders’ point of view.

Then the missionaries were soon faced with the problem of the transcription of Japanese in their mother tongue, a problem that has occurred anytime foreigners had wanted to present Japan in a written way, beginning with Marco Polo. At the same time, or even just before Hepburn, whose Romanization system has become the most widely used nowadays, our missionaries will yet develop an original method of Romanization of Japanese, different from that of the English-speaking American missionary, and taking the particularities of the French tongue in consideration.

Key words

Bakumatsu, Missionaries, Romanization, Japanese, French

*Division of Human and Social Science Education

幕末期に来日した二人の仏人宣教師の 日本語ローマ字表記について

Le ROUX Brendan*

1858年より、フランスの宣教師は新しく開港した港町（箱館、神奈川、長崎、のちに神戸と新潟）に滞在することが許されたが、キリスト教の布教に関しては依然として禁じられたままであった。沖縄や香港で日本語を学んだ上で、目標としていた布教活動とは違う活動をせざるを得なかった宣教師達は、日本とその文化や伝統に関する情報を収集し始めた。

幕吏の栗本鋤雲や小栗上野介と親しい関係を持ち、幕府とフランス公使レオン・ロッシュとの「パイプライン」的な役割を果たしたことで有名なメルメ神父は、箱館奉行と在箱館イギリス領事のおかげで訪れることができたアイヌ民族に関する論文と、更に日本のヒエラルヒーに関する論文を箱館に滞在した1859年11月から1863年6-7月までの間に執筆することになった。

一方、那覇で3年を過した後1859年の終わりに横浜に到着した、それほど有名ではないムニク神父は、『日本書紀』の最初の3巻に沿って、「天地開闢」から「神武天皇」に至るまでの日本神話に関する論文を著した。

メルメの后者の論文とムニクのものは両方とも1863年のもので、日本の内部から日本をヨーロッパに紹介しようとする、詳しい知識に基づいた試みである。

それで宣教師達は、マルコ・ポーロ以来問題にされてきた、日本語を母国語の文字にどう置き換えればいいのかという問題に直面することとなった。現在最も使われるようになったヘボン式ローマ字表記と同時期に、というよりもむしろ少し前に、フランスの宣教師達が、アメリカの宣教師ヘボンの表記法とは異なる、フランス語の特徴を活かした日本語のローマ字表記法を試行錯誤を重ねて試みていくこととなった。

Key words

幕末, 宣教師, ローマ字表記, 日本語, フランス語

*東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科社会系教育講座